コロシアイ学園生活が始まって
数週間。皆少しずつ信頼して
協力できるようになった頃、
僕部屋に手紙が置かれていた。

差出人は霧切さん…？
「夜に一人で私の部屋に来て。
誰にも見られないように」
…どういう意図なんだろう…

まあでも霧切さんの事だ。
なにか黒幕への手がかり
でも掴んだに違いない…!!

夜時間…

何とか誰にも
見られず来れた…

よし…

……え

扉に近づいた時、うっすらと
霧切さんの声が聞こえてきた…
確かに霧切さんの…だけど
明らかに様子がおかしい…。

誰かと会話している
わけでもなさそうだ…。

ん…

ギル…

あ…

はっ…

ギル…

ギル…

まって…

何か打ち付けるような音に
合わせて、浮ついたような
彼女の高い声が漏れ出ている

気のせい…僕が
何かの音と勘違い
しているんだと思った。

ガチャッ…

…だけど何故か…
すごく…
嫌な予感がした…。

勘違いと分かっていても
少しでも脳裏に変な憶測が
よぎってしまっていたから。

大丈夫…
大丈夫…

落ち着いて…
確認しないと…

キィ――――……

霧切さ…

そこには…僕の想像より
遥かに衝撃的な光景があった。
強烈な不快感と同時に
動悸が激しくなる。…絶望…？

見知らぬ男が裸で
霧切さんの身体に乗りかかり、
首に手を回し、動いている…。

霧切さんはそれに抗う
様子はなく、僕が現れたことに
戸惑っているようだった。

そして男は

ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぎゅうーーーっ♡
え…？
な、苗木君…？
どうしてここに…
くにっ
あ…
そんな霧切さんの意識を
戻すように、彼女の顔を寄せ
唇に舌を入れた……。
ん…♡
ぢゅるっ
ぢゅるるる

あっ
あぐぅ

ぐぢゅ

あの霧切さんが、まるで
身体を玩具みたいに
弄ばれている…

身体は常に痙攣を起こして
乱暴に掴まれた顔は、見た
事ないほど恍惚としていた。

僕なんか気にもかけて
ない…。きっと頭の中は
快楽のことしか考えられて
ないんだろう…。

時折僕の事を気にして
抵抗する素振りや声を
出していたけど…

それを黙らせるように
男の身体の動きは激しく
打ち付けるようになって…

ビッ
ビッ
ビッ

は〜〜

は〜〜

いつの間にか彼女の嬌声は止み、部屋は人間の生々しい臭いで満たされていた。

そして男は、霧切さんに覆いかぶさりながら耳元で何か囁きだした。

ぐっぷぷ

べちゃ〜〜

……？

霧切さん…？

でっ、でも…そんな……ひどい事……

……。

じ〜〜〜…

にゃぁ〜〜〜〜〜…ッ

…!!

ぷるぷる…

ぷるぷる…

ぷるぷる…

ぷるぷる…

ぷるぷる…

ぷるぷる…

聞こえずともすぐ理解できた。

彼女が選んだのは僕じゃない…。築いた信頼に何の意味もないことをつきつけられるのと同時に…

その〝目〟に…裏切る事に躊躇いがなくなり、僕を嗤う彼女の目に、とてつもない刺激を感じていた…。

ぎゅ…

ぎゅ…

ぎゅ…

キリギリ